

アラビア湾岸出土のメソポタミア系土器

後藤 健

The Mesopotamian Ceramic Vessels from the Arabian Gulf,
the 5th to the 1st Millennia B.C.

Takeshi GOTOH

アラビア湾岸では、さまざまな時代のメソポタミア系土器が出土しているが、その意味するものは一様でない。ウバイド式土器は、南メソポタミアの住民が海産物の獲得のために、定期的に到來した証拠である。ジェムデッド・ナスル式土器は、原文字期=原エラム時代の物資流通網に、湾岸が組み込まれたことを示している。前3千年紀後半のウンム・アン・ナール文明（マガン国）は、海上交易活動の結果として、メソポタミアの土器を獲得した。前2千年紀初頭には、バールバール文明（ディルムン国）がその役割を引き継いだ。その後、メソポタミア系の土器は急激に増加し、古代メソポタミア文明が滅亡した前1千年紀半ばまで、湾奥部の土器インダストリーは純粹にメソポタミア系であった。これらの土器は、湾岸における編年の確立に役立つだけでなく、平時の経済的関係、社会の変動期における住民の移動などを知るための糸口となる。

キーワード：メソポタミア系土器、アラビア湾岸

In the Arabian Gulf, Mesopotamian ceramic vessels have been found in the archaeological contexts almost through the ages. The Ubaid potsherds indicate periodical visitors from S. Mesopotamia for maritime resources. The Jemded Nasr pots suggest that the gulf had been incorporated in the Proto-literate/Proto-Elamite trade network. The Umm an-Nār Civilization (Magan) had a collection of Mesopotamian vessels as a result of its prosperous maritime trade. Magan's role was taken over by the Bārbār civilisation (Dilmun) around 2000 B.C. Mesopotamian vessels remarkably increased after the early Dilmun period and had exclusively prevailed in the inner part of the gulf until the mid-1st millennium B.C. when the last Mesopotamian dynasty was overthrown. These Mesopotamian vessels are useful to establish a chronology of the ancient history of the Gulf and we can even find clues to the economic activities and the human migrations.

Key-words : Mesopotamian ceramics, Arabian Gulf

はじめに

アラビア湾岸はメソポタミアに隣接する地域の一つであり、イラン高原、シリア、アラビア砂漠などとともに、先史時代から現在に至る各時代に、メソポタミアとの関係を保ってきた。その意味で、メソポタミア中心主義に立つならば、湾岸は数ある周辺の一つであったと言うことができる。

湾岸とメソポタミアの関係は通史的に存在し、アレクサンドロス大王によるアラビア征服計画やイスラーム時代の海上貿易、はては1991年の湾岸戦争さえも含まれる。しかし小論の対象は古代メソポタミア文明と湾岸の関係であり、以後の時代については稿を改めたい。湾岸各地では、様々な時代にわたるメソポタミア系土器が出土している。「中心」の研究者からみるなら、メソポタミアの都市遺跡で

いくらでも出土する見慣れた土器が、「周辺」で多少出土するからといって、それほどの関心事とはならないかもしれないが、「周辺」、殊に文字による記録が乏しい湾岸では、古代文明の先進地であり同時に研究の先進地である、メソポタミアと関係のある遺物の出土は、様々な意味で重要な意義をもっている。

古代メソポタミア文明は前4千年紀半ばのウルク後期に始まり、前6世紀後半にアケメネス朝ペルシアの支配によって終止符が打たれた。他方、湾岸では、前3千年紀半ばから前2千年紀初頭まで、ウンム・アン・ナール Umm an-Nār 文明（マガン国 Magan）とバールバール文明 Bārbār（ディルムン国 Dilmun）があいついで興り、インダス文明とメソポタミア文明の間で海上交易活動を繰り広げたことが知られている。筆者は、これらの文明が、それまでイラ

ン高原を中心に展開していた陸上交易ネットワークの進化形であり、古代メソポタミア文明の必要物資を供給する交易文明の移転によるものと考えた（後藤 1997, 1999他）。

文明期の湾岸の遺跡では、インド亜大陸、イラン高原、メソポタミアなど、遠隔地からもたらされた物資が多数出土している。そして古代文明が衰退した後にも、湾岸のもつ文化的多国籍性は消滅してはいない。もちろん以前に比べれば、相当地域化してはいるが。

湾岸におけるメソポタミア系土器は、土器インダストリーのほぼ全体をなす場合もあるが、イラン系、インダス系、地元湾岸製の土器のいずれか、あるいは全てと共に、複雑な土器インダストリーを構成する場合もある。湾岸出土のウバイド式土器のように、理化学的方法によって製作地が特定される場合は、「メソポタミア製」と呼ぶことに躊躇はない。つまり域外からの搬入品である。またハフィート Hafit 文化に見られるジェムデッド・ナスル式土器も一般にメソポタミア製とされている。

しかし以後の時代の湾岸出土土器は、たとえそれが従来メソポタミアで典型的とされる型式のものであっても、軽々にそう判断するわけにはいかない。湾岸で作られたものもあり得るからである。そこには、メソポタミアと湾岸という自然地理上の隣接地に、どのような人文地理あるいは政治的な地図を重ねるかという問題がある。もし湾岸の一部がメソポタミアの政権の支配下に属した時期があるとするならば、そこで製作された土器は何と呼ぶことが相応しいのだろうか？こうした問題は様々な時代に生じてくるので、ここでは「メソポタミア系」という暫定的な呼称を使う。研究の進捗により、「南メソポタミアの○○王朝の支配下にあったアラビア湾の××島で製作された土器で、同王朝の都市遺跡でしばしば出土する典型的な型式のもの」などの説明がなされる時が来るかも知れない。

メソポタミア出土のシュメール・アッカド語史料には、ウルク後期以来、湾岸に関する記事、湾岸とメソポタミアと

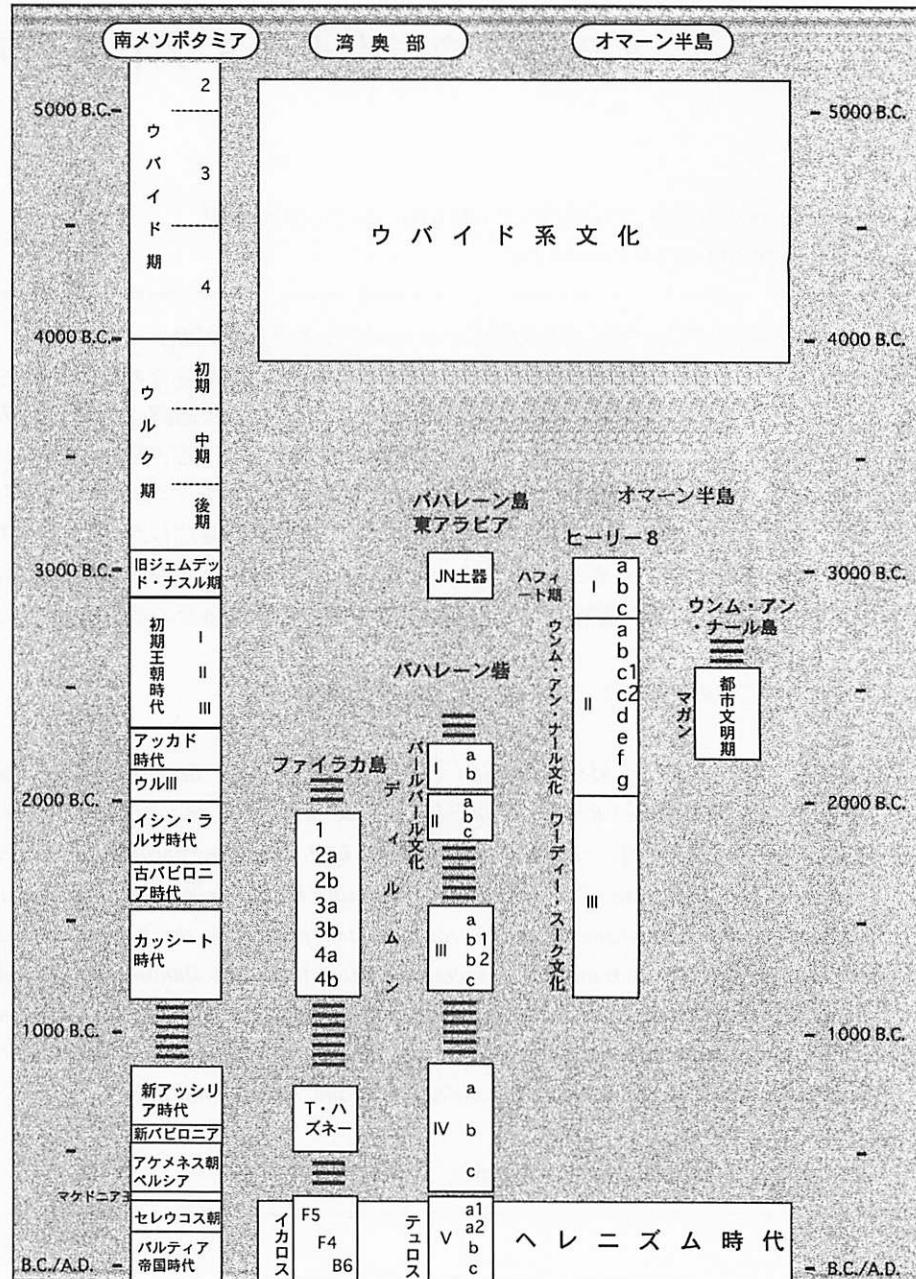


図1 アラビア湾岸の古代文化（前5～1千年紀）

のやりとりに関する記事が見られる。それによれば、商品又は戦利品として湾岸からメソポタミアに搬入された物資は多岐にわたるが、反対にメソポタミアから湾岸に持ち込まれた物資は単純に農産物だけである。

土器は、メソポタミアがほぼ唯一自前の材料で作りえた不朽の遺物である。もっとも土器の輸出などという記事はいかなる文書にもない。湾岸では絶対年代を知る方法が乏しいため、すでに年代の知られているメソポタミア製土器は、この地での編年確立のための大きな手がかりとなっている。そしてそれ以上に興味深いのは、それらが湾岸で出土することの意義を考えることである。出土するという事実は事実であるが、その理由が常に同じであるとは限らない。

いのである。小論では、各時代のそうした例を挙げ、「中心」たるメソポタミアの特徴をもった土器が、「周辺」たる湾岸で出土する理由を考察したい。

時代区分について

湾岸では、明らかな旧石器時代の考古学的資料は知られていない。アラビア湾自体が後氷期に形成されたものであり、ヴュルム氷期には、現在の海底が平原をなし (Vita-Finzi 1978)、現在のシャトル・アラブ川はホルムズ付近に河口があったから、当時的人類の痕跡は、あったとしても、ほとんどが失われてしまつたに違いない。

物証によって確かめられる最初の人類文化は、かつてホルガー・カペル (H. Kapel) によって「カタルB文化」と呼ばれたもの (Kapel 1965, 1967)、及びそれに類する石器文化で、前8000～5000年ほどの間続いた。これはアラビア半島全域で見られる石器文化の一部であり、石刃鎌を特徴とする石器インダストリーが知られている。炉址以外の遺構は知られておらず、移動性の高い生活を示している。カペルはこれを「中石器文化に相当するもの」とした。

次は高度の押圧技法をもつ石器文化で、前5000～3600年ほどの間続いた。これもアラビア半島全域で見られる石器文化の一部で、逆刺の付いた有茎石鏃が特徴的なインダストリーが知られている。狩猟・採集を生業とするが、アラビア半島に特有の「新石器文化」と呼ぶことが可能である（後藤 1983）。以後の諸文化の編年表を、メソポタミアとの対比によって示すこととする（図1）。

湾岸の歴史には、その後、数百年の空白がある。メソポタミアではウルク期後半にあたり、人類最古の都市文明が成立し、また周辺部へ拡張を開始した時代であるが、湾岸では、その影響も、また独自の文化も知られていない。オマーン半島における前3100～2800年頃の時代は、「ハフィート期 (Hafit Horizon)」と呼ばれる。湾奥部では、それに並行する時代名はまだない。アル・アイン・オアシス近傍のハフィート山 (J. Hafit) などで、単室の積石塚墓群が多数発見されており (Frifelt 1971, During-Caspers 1971)、副葬品の中にジェムデッド・ナスル式彩文土器が見られる。極めて特徴的な遺物であり、メソポタミアとの関係を証明するものである。

これに続く時代も、オマーン半島を中心として知られている。ハフィート文化を継承するウンム・アン・ナール文化が前2700年頃成立し、前2400年頃にはウンム・アン・ナール島を首都兼国際港とするウンム・アン・ナール文明が成立了。メソポタミアの文書では、「マガン（マカン）国」と呼ばれるものである。この文明は銅を始めとする自国の産物

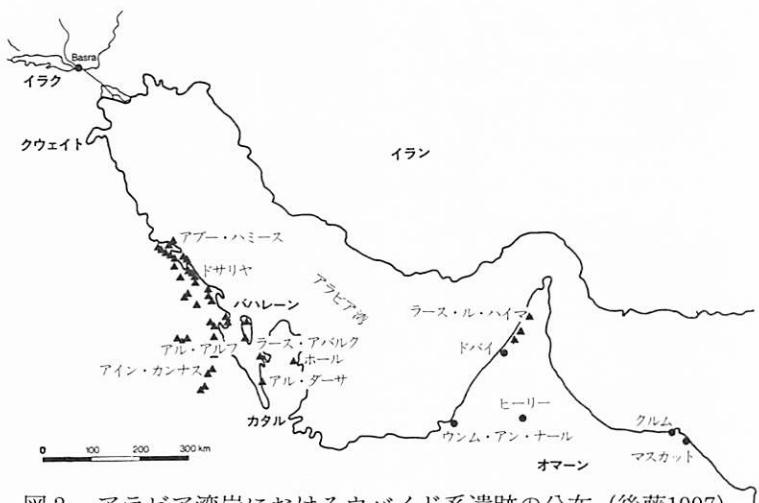


図2 アラビア湾岸におけるウバイト系遺跡の分布（後藤1997）

のほか、インダス文明の産物をメソポタミアに供給した。

ウンム・アン・ナール文明は前21世紀に衰退し、オマーン半島には、もはや地方的文化に過ぎないワーディー・スク文化 (Wādī Sūq Culture) が、前1300年頃まで続いた。この頃以降、オマーン半島にメソポタミア系土器を見ることはなくなる。一方、湾奥のバハレーン島では、すでに存在したバールバール文化の中に、前21世紀に、突然周壁を持った都市が出現し、湾岸における第二の都市文明=バールバール文明が成立した。メソポタミアの文書によれば、この文明は「ディルムン（ティルムン）国」と呼ばれていたので、現在のバハレーン国では、直前の段階をも含めて、「初期ディルムン時代」と呼んでいる。バールバール文明はウンム・アン・ナール文明の役割を引き継いだことが明らかなので、筆者はその成立を「文明の移転」によるもの、それぞれを湾岸古代文明の前半と後半を担うものと考えた（後藤 1999）。

バルバール文明は、前18世紀頃、その本拠地のあったバハレーン島では衰退した。しかし、対メソポタミア交易の拠点であったクウェイトのファイラカ島は、その後もしばらく、命脈を保っていた。そして前2千年紀半ばになると、「カシート時代」が始まる。「カシート時代」の痕跡は、ファイラカ島とバハレーン島、東アラビア、カタル半島の一部で見られる。現在のバハレーン国では、「中期ディルムン時代」とも呼んでいる。

オマーン半島におけるワーディー・スク期の集落遺跡は、その後も継続使用された例が多いが、土器製作技術の伝統やその他の遺物・遺構に見られる大きな変化は、前2千年紀末に始まる新しい時代を示している。「鉄器時代」と呼ばれるこの時代は、イラン高原の鉄器時代のものと似た物質文化が見られる。他方、パハレーン島、サウディアラビア東部、クウェイトのファイラカ島などの湾奥部でも、アレクサンドロス以前の前1千年紀を「鉄器時代」と呼ぶ。

現在のバハレーン国では「後期ディルムン時代」と呼んでいる。そしてアレクサンドロス大王の東征に続いて、彼のアラビア征服計画・アラビア周航計画が部分的に実施されたことにより、前300年頃、アラビア湾はギリシア人の海となつた。

前6世紀に始まるアケメネス朝の支配によって、古代メソポタミア文明は滅亡した。したがって、メソポタミアは何かの「中心」ではなくなつた。そして次に、ギリシア人の支配するところとなつた。この時代のアラビア湾岸では、セレウコス朝の都市が各地に建設され、定住者のための墓群も作られた。そのため「ギリシア時代」、「ヘレニズム時代」のほかに、現代のバハレーン国では、本島のギリシア語の呼称「テュロス」(Tylos)に因んで、「タイロス時代」と呼ぶ習慣がすでに定着している。当時クウェイトのファイラカ島は、ギリシア風に「イカラス」(Ikaros)と呼ばれていたから、地域的な時代名として「イカラス時代」と呼ぶことが可能だが、それはまだ定着していない。

以上が紀元前後までの湾岸古代史の時代区分である。所々に空白期間が生じているのは、研究の遅れというよりも、考古学的資料の空白ないしは極端な減少によるものである。実際に人口が減少した場合もあるだろうが、石器時代の場合では、海進・海退によって、遺跡そのものが、現在では感知できなくなつてしまつた例もある。

ウバイド系文化

湾岸の「新石器文化」の遺跡では、ウバイド式土器が出土することがある。そのような遺跡を、ここでは「ウバイド系文化」、「ウバイド系遺跡」と呼ぶこととする。かつてそれ

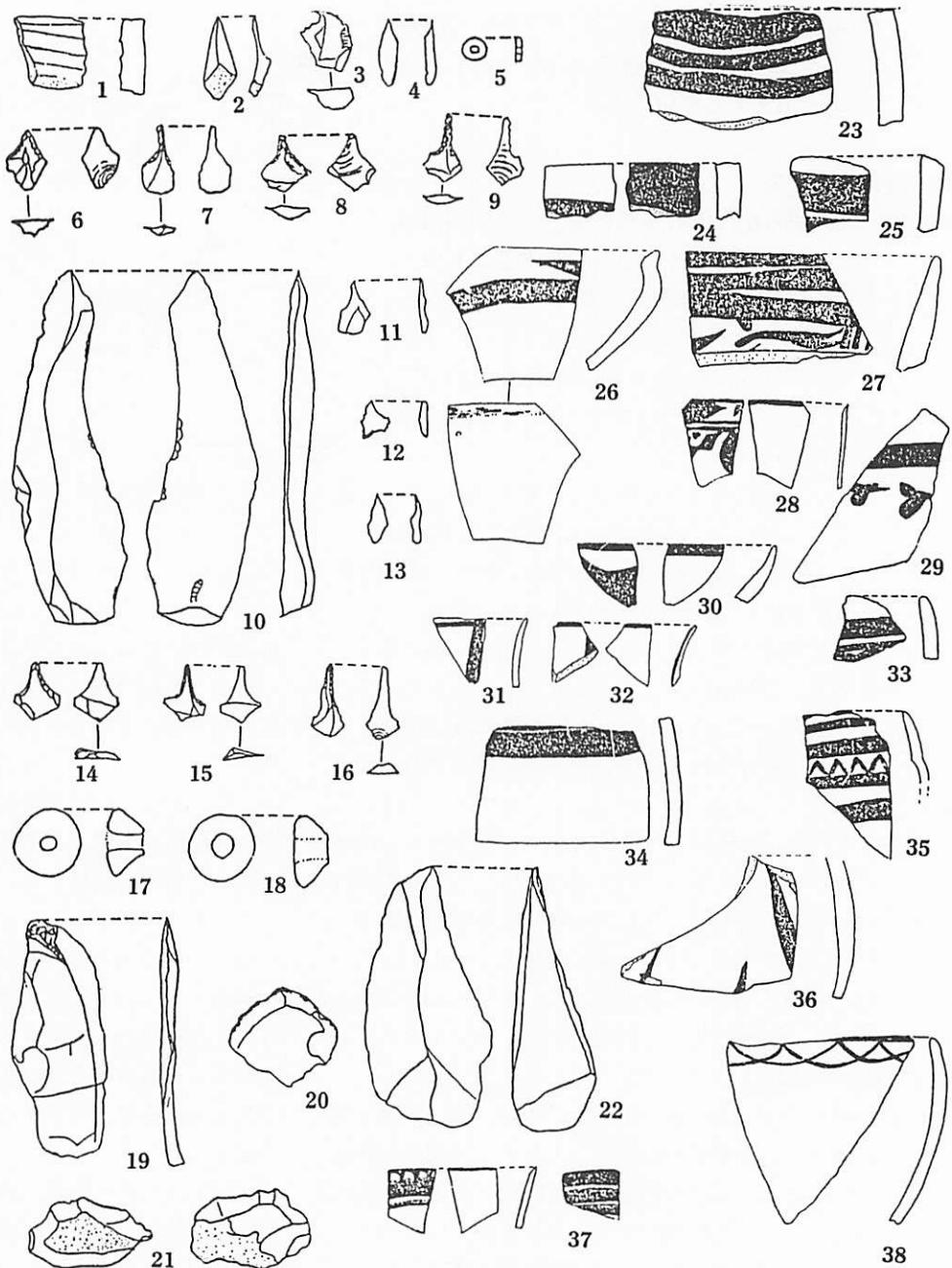


図3 アブー・ハミース出土遺物 (後藤1983: 図版9) S=不統一
1~9: 第8層、10~13: 第4層、14~18: 第6層、19~21: 第7層、23~25: 第1層、
26~29: 第2層、30~32: 第3層、33~34: 第4層、35~36: 第5層、37: 第7層、38: 第8層。

らは、ハサ地方のアブー・ハミース (Abū Khamīs) を北限、カタル半島を東限とする分布範囲を示しており (Masry 1974; de Cardi 1978)、メソポタミアのウバイド式土器のスポット状の「飛び地」と考えられていたが、現在はオマーン半島西岸における発見例が年々増加しているほか、クウェイトでも大規模遺跡が確認されているという (Frifelt 1989)。

現在湾岸で知られているウバイド系遺跡の総数は50ヶ所ほどで、サウディアラビア、バハレーン、カタル、アラブ首長国連邦 (U.A.E.) にクウェイトを加えた5カ国に分布

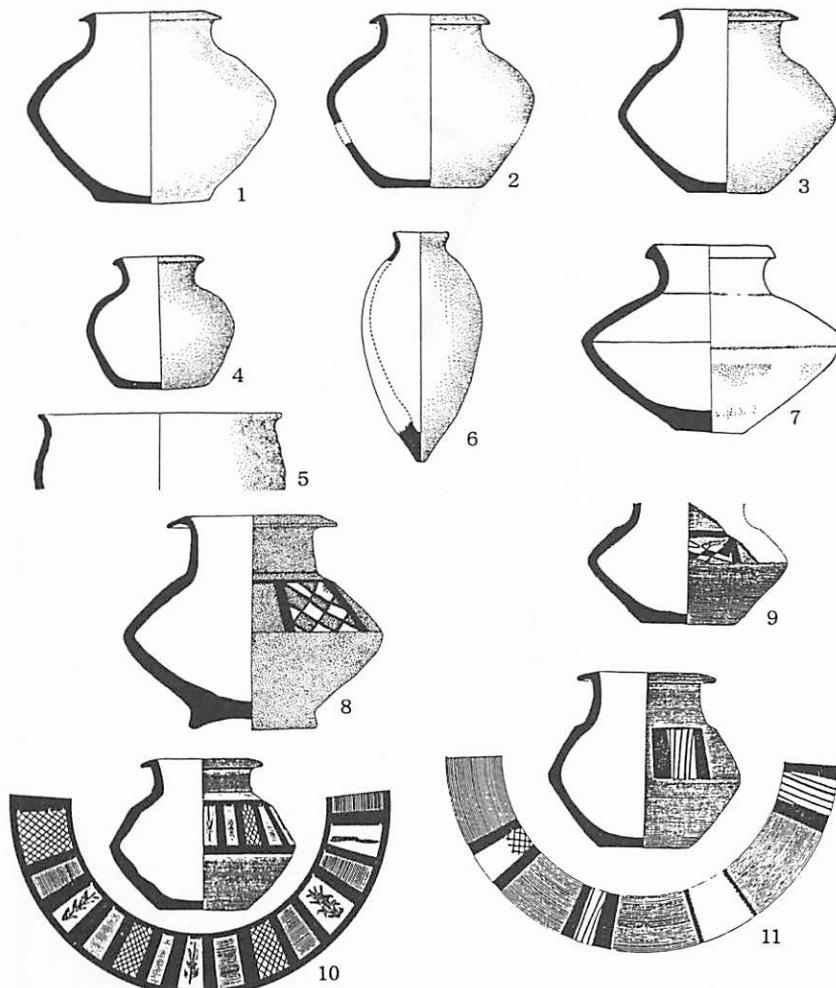


図4 オマーン半島出土のジェムデッド・ナスル式土器
(後藤 1997: Fig 19) 7, 8:S=1/4、他:S=1/5

し(図2)、ほとんどは当時の海岸線近くに位置する。一見遺跡数はかなり多いが、それはウバيد式土器の小破片が1～数点採集されただけの小遺跡も含まれているからである。層序をもった遺丘を形成するものは極めてわずかである。

サウディアラビアにおける最大のウバيد系遺跡は、ハサ地方のドサリヤ(Dosariyah)で、土器型式はウバيد3期の早い時期に位置づけられ、またアブー・ハミースのものは、これよりやや遅れる(図3)。例外的に現在の海岸線から60kmほども内陸部に位置する(実は当時の湖沼に面していた)AIN・カンナス(Ain Qannas)出土の土器は、ウバيد2～3期に位置づけられている(Oates 1976)。

バハレーン島の西海岸に近いアル・マルフ(Al-Markh)では、貝塚、炉址群が発見された。また上下2層からなり、下層では土器が存在するが、上層では見られず、石器の数が激増する。石器は逆刺付き有茎石鏃を含み、下層と上層で、質的变化はない。土器片は下層でのみ出土し、J・オウツによれば、ウバيد後期(4期か以降)あるいはボス

ト・ウバيد期のものである。自然遺物は真珠貝を初めとする食用可能な貝殻、魚骨、哺乳動物骨などである。

カタル半島では、西海岸のアッ・ダアサ(Al-Da'asa)、ラース・アブルーク(Ra's Abrūq)、東海岸のホール(Al-Khōr)近郊の諸遺跡で、ウバيد式土器の破片が少数採集されているが、大規模な遺跡は知られていない。アッ・ダアサの資料のうち、ウバيد3期初頭にさかのぼるものも少数あるが、ほとんどはそれ以降の型式とされている。またラース・アブルークの土器はそれより新しく、アル・マルフ出土資料に近い年代であるという(Oates 1978)。ホール近郊で出土した土器片は極めて少量であるが、ウバيد3～4期とされている(Iniyan 1980)。

オマーン半島西岸を占めるU.A.E.の一部では、近年、小規模なウバيد系遺跡がいくつか発見されており、湾岸におけるウバيد式土器の分布圏は東へ拡張してきた(Boucharlat et al. 1991; Haerinck 1991; Uerpman and Uerpman 1996など)。いずれにおいても土器の出土は非常に限られており、数点の小破片にすぎないため、型式の認定が困難な場合が多いが、シャルジャ近郊のハムリーヤ(Hamliyah)の場合は、製作技法、文様

などからウバيد3期とされている。

湾岸出土のウバيد式土器はほとんどがメソポタミア製、その多くはウル、エリドゥ、アル・ウバيدなどと製作地が共通する南メソポタミアの製品であるとする胎土の理化学的分析結果がある(Oates et al. 1977)。他方、これらの土器にメソポタミア製品ではない赤色粗製土器が伴う例があり、地元で製作されたものと考えられている。そしてこの粗製土器は必ずウバيد式土器に伴う。つまり湾岸では、ウバيد式土器がメソポタミアから持ち込まれた期間だけ、地元でも土器作りが行われたのであり、アル・マルフで見られるように、ウバيد式土器が持ち込まれなくなると、土器作りも停止するのである。

それまでになかった土器というものがメソポタミアから持ち込まれ、それに触発されて、在地の住民が土器作りを開始したのであれば、当初はメソポタミア製品を模したものが作られ、その後、搬入が途絶えても、独自の土器文化が根付いたかもしれない。赤色粗製土器がウバيد式土器には似ておらず、ウバيد式土器と同時に消滅してしまう

事実は、それらを遺した人々が在地の住民ではなく、土器を常用するメソポタミア出身の人々であった可能性を示している。

メソポタミアにおけるウバイト文化は全体として農耕文化であるが、金属や貴石などの遠隔地産物資が、部分的にしろすでに見られる。その搬入には、専業の農耕民でないウバイト人が関与していたはずであり、湾岸のウバイト系文化を遺したのは、そうした人々かもしれない。J・オウツ (J.Oates) らが指摘するように、彼らは滞在先で使用する個人的所有物としてウバイト式土器を湾岸にもたらし、さらに滞在中に地元の材料で赤色粗製土器、すなわち用途の異なる煮沸用器具を作り、使用したのだと考えられる。

アブー・ハミース、ドサリヤ、AIN・カンナスのような大遺跡は、その広さもさることながら、同一地点に近接した時期の集落が幾度も営まれた、一種の「テル」をなすことが特徴である。アブー・ハミースでは8層、ドサリヤでは7層ある文化層の全てにおいてウバイト式土器が出土し、AIN・カンナスでは14層ある文化層の上位4層で出土した。これらの層序は季節的居住の繰り返しを示すものである。

石刃技法をもつ「中石器時代」の石器インダストリーの衰退後、発達した押圧剥離技法による特徴的な有茎石鏃をもった「新石器時代」の石器インダストリーが現れることは、AIN・カンナスの層序で示される。ウバイト式土器は「新石器時代」のある段階で出現し、やがて消滅する。その存続期間は、土器型式に従えば、ウバイト2期から4期またはポスト・ウバイト期までということになる。

ウバイト系遺跡の分布は旧海岸（湖岸）付近に限定される。その担い手が海産物、特に真珠貝の採集集団であったと考えられるからである。アブー・ハミースでは、大量の真珠貝殻のほか、穿孔用の石錐も多数出土しているので、真珠（母）の工房があったものと思われる。現在もそうであるように、良好な真珠棚は湾内に限られ、ウバイト系遺跡の分布はオマーン湾やアラビア海には広がらないのである。

近代におけるアラビア湾の真珠漁期はガウスあるいはガウス・アル・カビールと呼ばれ、だいたい5月の半ばから9月の半ばまでの4か月間であった。日中の水温が水中での作業に適した25°C以上となるからである（池ノ上 1987：50）。ウバイト系文化の担い手たちも、ほぼ同じ季節に海辺の集落を基地として作業に従事したものであろう。

湾岸におけるウバイト式土器は、この地の住民が何らかの理由でメソポタミアから入手した可能性も皆無とはしない。しかしドサリヤで採集された葦の圧痕をもつプラスチック片は、南メソポタミアの建築様式を知る者がこの地を訪問し、各年数ヶ月の滞在のために、彼らにとって最も普

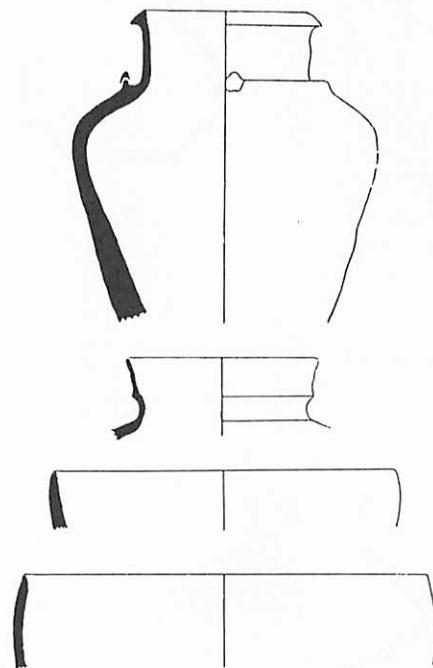


図5 ヒーリー8遺跡I期のメソポタミア系土器
(Cleuziou 1989より構成) S=1/5

通の方法で家を建てたことを示している。

ハフィート文化

ウバイト期以後、メソポタミアではそれとは異質の文化であるウルク文化が興り、人類最古の都市文明が誕生した。それはシリア、アナトリア、スーシアナなどのメソポタミア周辺地域に植民都市を作り、さらには王朝0期のエジプトに影響を及ぼした。しかし湾岸では、ウルク文化関連の遺物も、それに並行する土着的文化の存在もほとんど知られていない。その理由を、ポッツ (D.T. Potts) は自然環境の変動に求めている (Potts 1990: 62, 63)。しかし、ウルク文化（文明）の拡大はメソポタミア型農耕社会の移植であり、可耕地がその対象とされたから、メソポタミアが湾岸に関心を抱く理由はなかったと、より単純な説明が可能である。

ハフィート式墳墓で出土するジェムデッド・ナスル式土器は、その中でも特殊な器種に限られる。典型的なのは、張り出した稜をもった算盤玉形の胴部、太くて短い円筒形の頸部、外側に開いて幾分垂れ下がる鍔状の口縁部をもつ壺で、胴部上半に単彩あるいは多彩によるパネル状の文様がめぐらされるものである（図4）。

アル・AIN郊外にあるヒーリー8遺跡 (Hili 8) は前3千年紀初頭から前2千年紀にかけての連続的居住が証明された集落遺跡で、I期がハフィート期に相当する。出土土器は非常にわずかであるが、「ジェムデッド・ナスル期」か

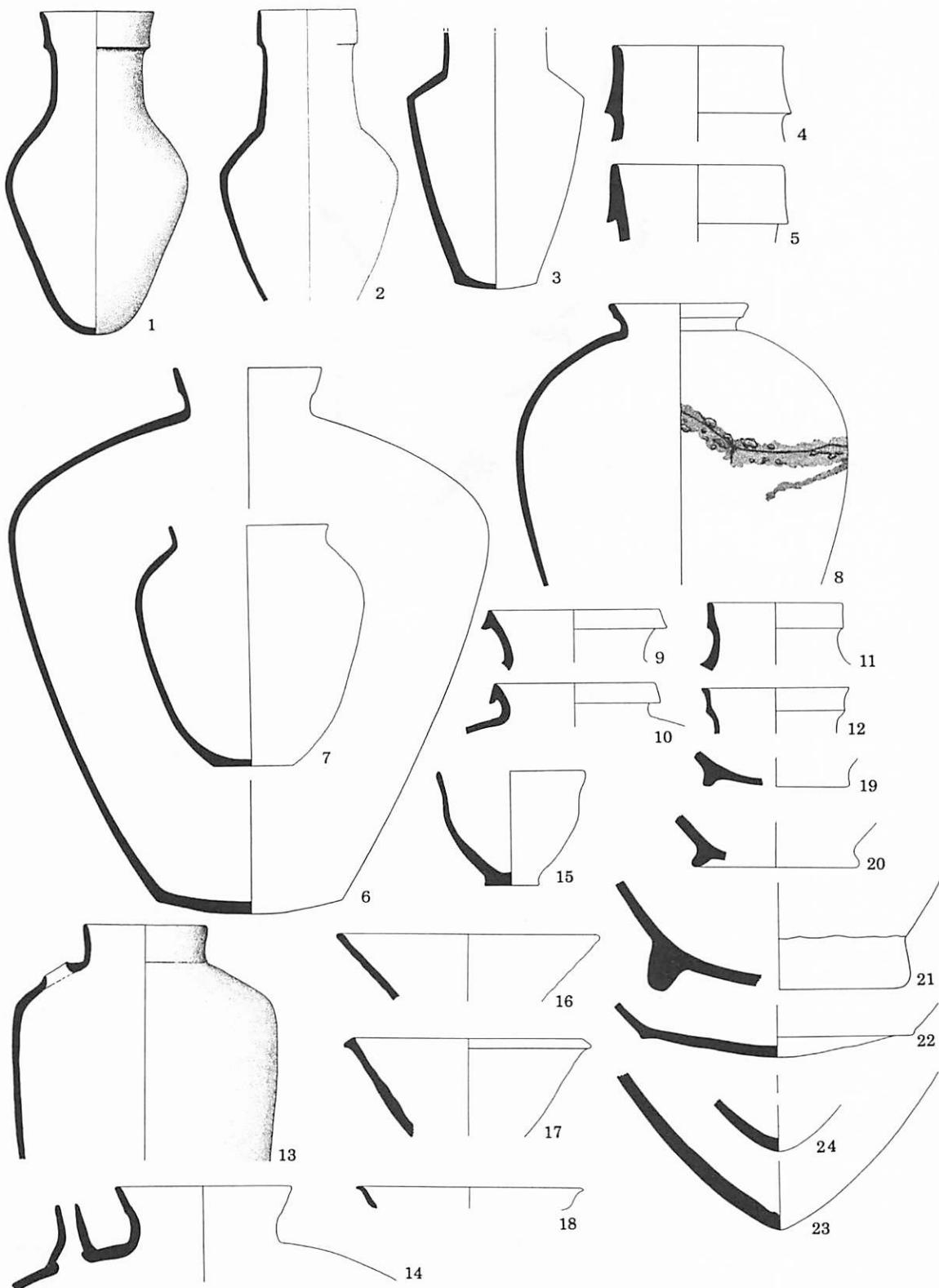


図6 ウンム・アン・ナール島出土のメソポタミア系土器 (Frifelt 1991、1995より構成) S=1/6

ら初期王朝時代I期の特徴を示す土器が含まれる(図5)。それ以外の土器として、精製の黒色彩文赤色土器(Black-on-red ware, 以後BOR)がある。後に述べるウンム・ア

ン・ナール文化で盛行する土器の前身と考えられ、イラン東南部の土器の特徴を示している。オマーン半島では、この時代、メソポタミアとイランの双方から土器が搬入され

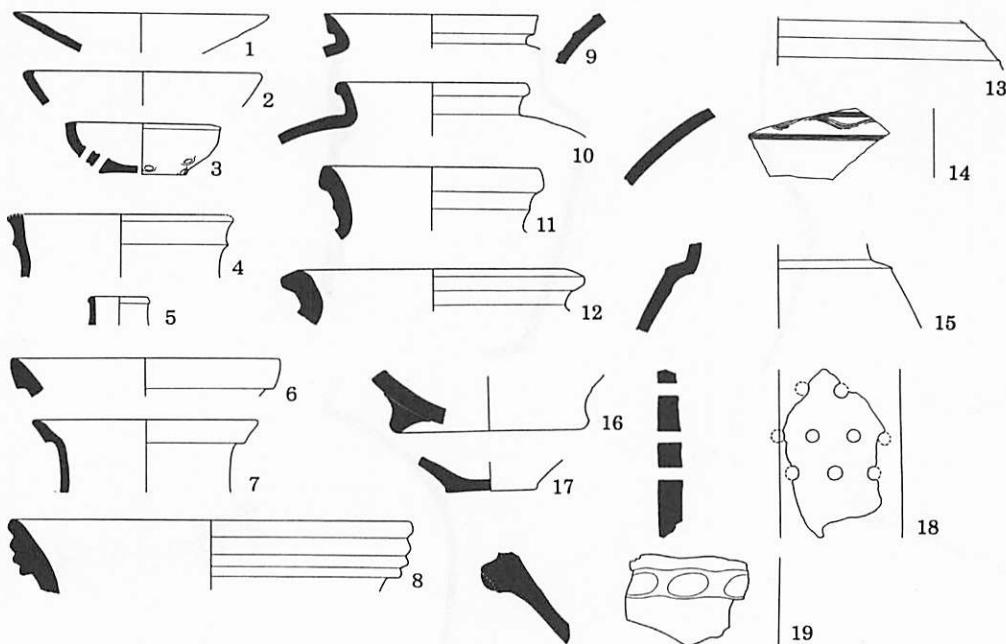


図7 バハレーン島I b期のメソポタミア系土器 (Højlund and Andersen 1997より構成) S=1/5

ていたことがわかる。地元での土器製作はまだ始まっていない。

イラン高原東南部のテペ・ヤヒヤ (IV c期) は、「原エラム文書」をもつ原エラム文明の都市の一つであるが、ここでは典型的なジェムデッド・ナスル式彩文土器のほか、ビヴェルド・リム碗も出土している (Lamberg-Karlovsky and Tosi 1973)。ヤヒヤのジェムデッド・ナスル式土器は、スーザから1000km余り隔たった「飛び地」のような出土に見えるかもしれないが、ホルムズ海峡を隔てたオマーン半島のハフィート期を併せて考えるならば、新たな解釈が成り立つだろう。

なぜならそれは、湾奥のバハレーン島、あるいはサウディアラビア東部でも見られるからである。バハレーン国立博物館にはハマド・タウン (Madinat Hamad) の古墳群出土の壺数点が展示されており(未報告)、またバールバール神殿 (Bārbār Temples) 近くから1片、報告例がある (Mortensen 1971)。パイシンガー (C.M. Piesinger)によれば、湾奥の出土地はいずれもアラビア本土でも海岸部に近い位置、あるいはタールートやバハレーンのような沿岸の島嶼にあり (Piesinger 1983)、ヒーリー8遺跡でのようないran系の土器を伴うものはない。

ウンム・アン・ナール文化

ヒーリー8遺跡II期 (ウンム・アン・ナール文化) の出土土器は、次のような変化を示す (Cleuziou 1989: 74-78)。II期はII a-II c1/II c2-II d/II e/II f-II gの4時期に細分される。II a-II c1期には、I期と同じメソポタミア系土

器とBORが続くが、前者は一握りの破片のみに減少する。II c2期になると、地元製の砂質土器が大量に出現し、後の各時期では全体の95%以上を占めるほどになる。II e期の土器は器形と文様が以前と異なるが、II f, II g期のものは余り違いがない。II f-II g期、特にII f期では、突出して大量の土器が出土する。iran系と思われる精製土器はほとんど姿を消す (副葬品に限られることになった)。

II期の初めにメソポタミア系土器が激減し、iran系のBORが存続することは、メソポタミア色が薄らぎ、iranとの安定した関係が継続したことを反映しているのである。ところが次の段階で地元製の土器が出現したことは、それまで搬入されていた土器、特にiran系の彩文土器を手本として、文明期のウンム・アン・ナール文化に特徴的な、日用雑器としての砂質土器のインダストリーが確立したことを意味する。「ブライミー式」とも呼ばれるこの土器を作成した窯の例 (ロストウ式窯) が、近隣で発見されている (Frifelt 1990)。

ウンム・アン・ナール文化が都市文明期を迎えるのは、ヒーリー8遺跡のII e期のことである。この時期のメソポタミア系土器の出土を例示するためには、首都兼国際貿易港であるウンム・アン・ナール島の出土遺物を考察するのが最良の方法である。ブライミー式、iran系、インダストリーのほか、明らかに初期王朝時代のメソポタミア系と判る土器が、まとまって1グループをなしているのも、この島がもっていた特別の機能によるものである。

ここでは、集落域と墳墓群で、出土土器の内容が大いに違っている。墳墓出土の土器群はiran方面から搬入され

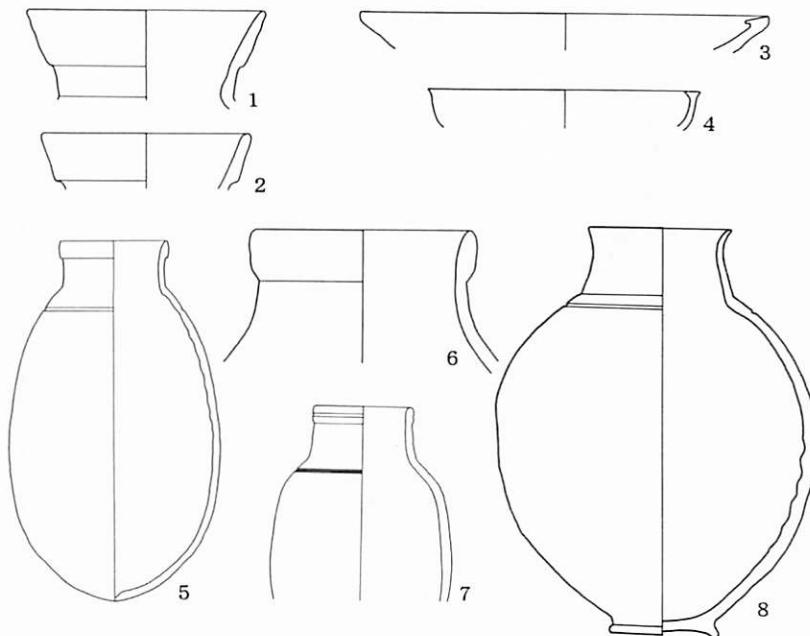


図8 フайлカ島1～3A期のメソポタミア系土器
(Højlund 1986より構成) 5, 7:1/10, 他は1/3

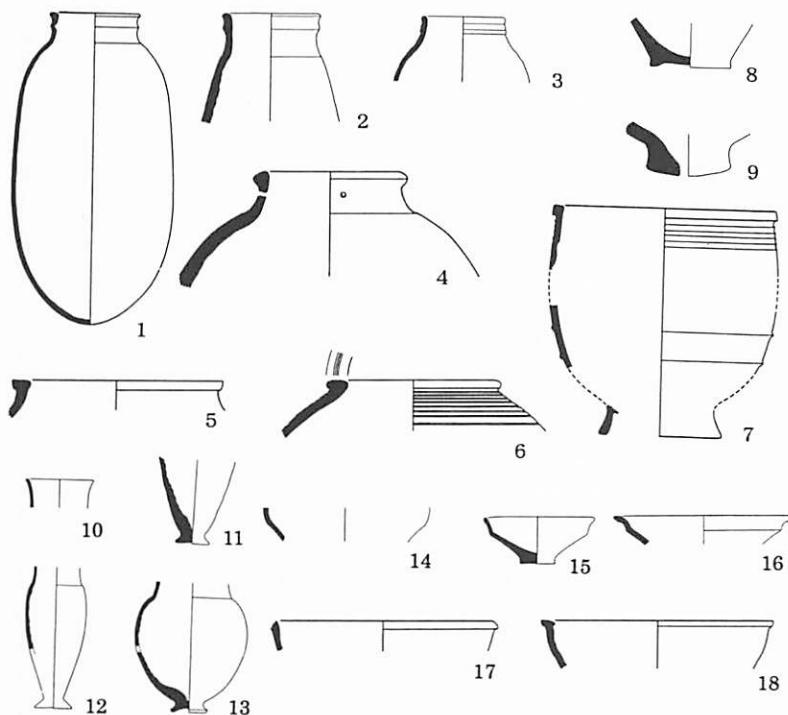


図9 バハレーン島IIIb1期のメソポタミア系土器
(Højlund and Andersen 1997より構成) 1/10

たと思われる精製土器 (BOR、黒色彩文灰色土器、刻文灰色土器) が主体を占めるのに対して、集落出土のものは地元製土器 (ブライミー式) を含む日用雑器が主体を占め、それに各種の搬入土器が加わって、より複雑な内容を示している。メソポタミア系土器はその両者で見られ、中でも

二重口縁をもつ各種の壺、輪高台と注口をもつ容器は、メソポタミア系土器の典型的な器種である(図6)。胎土の鉱物組成分析により、南メソポタミアのアブー・サラビーフ (Abū Salabīkh) 出土の類品と一致する結果が得られ、両者が同種の胎土から製作されたとされている。

これらの土器はメソポタミアで作られ、ウンム・アン・ナール島まで、海路でもたらされたものであろう。そしてそれには運搬用の容器が含まれる。メソポタミアから何かを容れた状態で、それらはウンム・アン・ナール島へ持ち込まれ、内容物が消費された後も、道具として使用され、時には死者の用を足すものとして、墳墓に供えられたのである。当時のメソポタミアの文書は、メソポタミアにもたらされたマガンの産物については詳しく述べているが (Glassner 1989)、メソポタミアからマガンに送られた物資については、後のディルムンの場合ほど詳しくない。しかし、同じ物資は双方向で輸出されることがなく、マガンが必要としていた物資は、基本的に後のディルムンの必要物資に近い内容であったと仮定すれば、内容物は農産物以外に考えにくい。もしそれが液体であれば、ゴマ油の可能性が高い。

バールバール文化

「初期ディルムン時代」の中心的な集落遺跡はバハレーン島のバハレーン砦である。また文明期に入ると、クウェイトのファイラカ島には、対メソポタミア交易の拠点が置かれた (後藤 1997: 123)。

バハレーン砦のI期はIa～Ib期、II期はIIa～IIc期に細分される。II期に都市周壁が作られ、約15haの面積が囲われた。「520地区」の発掘によれば、Ia期の土器は1) 地元製バールバール式土器 (87%)、2) メソポタミア系土器 (10%)、3) ウンム・アン・ナール文化からの搬入土器すなわちBOR (3%) であった (Højlund and Andersen 1994)。

この他に、1片だけ、インダス文明起源と考えられる大型容器の胴部破片がある。上の比率は、Ib期になると73%:19%:3%となり、都市文明成立直前のバールバール文化では相当の割合で、メソポタミア系土器が存在し(図7)、しかもIa期からIb期にかけて若干増加して

いることがわかる。

II a期になると、バールバール式が92%に増加するが、メソポタミア系土器は6%に激減し、BORはほとんど姿を消す。II b～II c期では、土器群の構成内容はII a期からほとんど変化がないが、メソポタミア系はほぼ絶滅する。このように、バハレーン砦のバールバール文化においては、文明期に入る直前にメソポタミア系土器が多いが、都市文明が成立すると消滅に向かうという奇妙な現象を示している。

メソポタミア系土器の分析が進むことにより、現在ではバハレーン砦の絶対年代について、相当詳しい情報が得られている。バハレーン砦I b期及びII a期のものは、いずれもウル第三王朝時代の型式及びその組み合わせに相当するが、それらに先行するI a期の資料中に、ウル第三王朝時代の型式は皆無か、極めて稀にしか見られず、アッカド時代後期に限定される。I b期で出土したメソポタミア系土器の口縁部破片の内面に、容器の法量を示す楔形文字銘文が刻まれた例があった。ニップルで類例があり、ウル第三王朝時代に位置付けられるという。

ファイラカ島におけるバールバール文化の遺跡(F 3、F 6の両丘)では、最初の居住(1期)がバハレーン砦のII b期に並行し、その後2 A、2 B、3 A、3 B、4 A、4 Bの居住時期が、前2千年紀の後半に至るまで連続的に見られる。520地区の発掘によれば、バハレーン砦では、バールバール文化の居住はII c期をもって一旦終わり(報告者によれば前1900年頃)、前1600年以降にあらためてIII期(カッシュート時代)の居住が始まるまで、断続している。

ファイラカ島におけるメソポタミア系土器の出土は、以下のようである(Højlund 1987)。1～2期では、大半がバールバール式で、メソポタミア系土器はわずかにすぎない(1～7%)。朝顔形に開いた二重口縁をもつ短頸長胴壺(図8-1～2)は特徴的で、メソポタミアでは、イシン・ラルサ時代を中心に、ウル第三王朝時代から古バビロニア時代まで見られるものである。また2期で見られる、特徴的な口縁部をもった2種の鉢(図8-3～4)は、メソポタミアでは古バビロニア時代に見られる。1・2期はイシン・ラルサ時代に並行する。3 A期になると、メソポタミア系土器は50%に激増する。二重口縁を持つ短頸長胴壺群が依然含まれる(図8-5～7)。またわずかに外反する薄い単純な口縁部をもつ短頸壺(図8-8)は、古バビロニア時代に酷似する例がある。3 A期は古バビロニア時代に並行する。

以上のようなメソポタミア系土器の分析から、バールバール文化の上限は、アッカド時代後期と並行する時代までさかのぼることができ、ウル第三王朝時代並行期にバハレーン砦を中心とする都市文明期を迎えた、そしてイシ

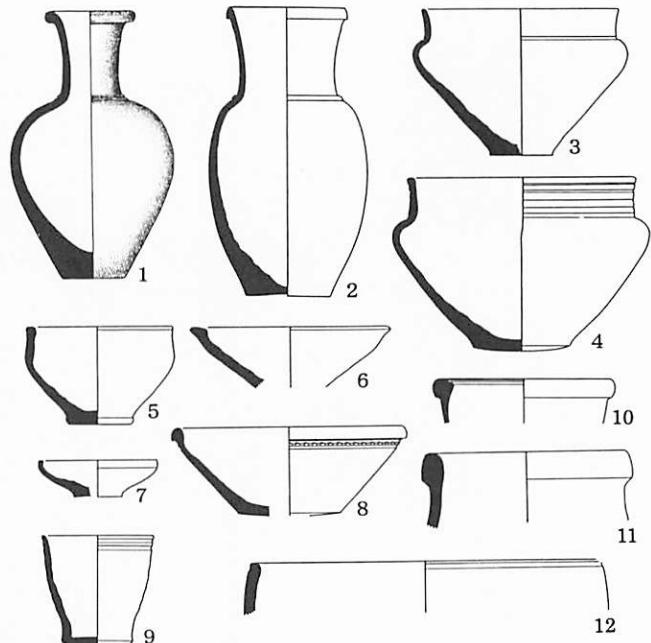


図10 バハレーン砦IVb期の土器インダストリー
(Højlund and Andersen 1997より構成)

S=1/5

ン・ラルサ時代並行期には、ファイラカ島に第2の都市が作られたことがわかる。ファイラカの都市は古バビロニア時代、あるいはそれ以降まで存続した。

3 A期に激増したファイラカのメソポタミア系土器は、以後の各期では60～99%となる。これは単に輸入量が増えたという次元ではなく、1～2期と3 A期の間に、物質文化上の激変を認めざるをえない。

バハレーン砦には、ファイラカの3 A期に並行する居住層が存在しない。この時期の南メソポタミアは荒廃を極め、名だたる都市群が無人化した。インダス文明もすでに滅亡した。その中でファイラカ島のみが繁栄を続けていた。ファイラカのF 3丘では、3期に神殿が建設され、F 6丘では「宮殿」と呼ばれる1～2期の建物が再建されるなど、公共事業が盛んに行われた。

その事情を、クローフォードは「海国王朝」との関係で説明を試みる(Crawford 1996)。「海国」はニップル出土文書などに断片的に知られ、前18世紀末から約300年間南メソポタミア最南部を支配したと言われる。またディルムン国の出先であるファイラカ島を征服した。そこへ荒廃したウルから、バビロンによる懲罰的遠征を避けるディルムン商人たちが大挙移住した。そしてこの時期の繁栄をもたらしたファイラカの交易相手とは、メソポタミア、インダスにおける大不況にもかかわらず繁栄を続けていた、スーサであったという大胆な仮説である。

カッシート時代の土器

湾岸におけるカッシート時代とは、カッシート王朝支配下のメソポタミアで使われていたものに酷似する土器インダストリーを特徴とする時代で、ファイラカ島とバハレーン島、カタル半島や東アラビアの一部にのみ見られる。バハレーン砦520地区の発掘で存在が確認されたもので、II c期以降の断絶期を経た新たな時期に属す(III a～III c期)。520地区では建築遺構を伴わないが、遺丘中心部に近い「519地区」では、「倉庫」と呼ばれる建物(I号建物)が発見された(Højlund and Andersen 1997)。それはIII a期に始まり、III b1期に大規模な火災に遭って廃絶され、その上にIV期の建物が建てられた。III b1期の堆積層は、焼け落ちた屋根のピチューメン層によって守られる結果となったため、出土遺物が非常に豊富で、III期の内容を知るための好例である。

III b1期の土器インダストリーは、ほぼ純粹にメソポタミア系である(図9)。バールバール式土器の口縁部破片1点が含まれるが、混入の可能性が高い。ちなみにその下層で出土したIII a期の土器インダストリーでは、まだ若干のバールバール式が含まれていた。III b1期の基本的な器種は貯蔵用の大型容器とゴブレット、浅鉢の3種であり、それぞれがいくつかの型式に分かれる。

ファイラカ島におけるカッシート時代は、バールバール文化最後の繁栄期であった3 A期に続く、3 B、4 A、4 Bの各期であり、F 3、F 6丘で認められる。土器インダストリーの中で、メソポタミア系土器の占める割合は圧倒的に多く、土器インダストリーだけから見れば、この島自身がメソポタミアの物質文化圏の一部となつたかのようである。3 B期の土器は60%(F 3丘)あるいは91%(F 6丘)がメソポタミア系であり、残りがバールバール式である。それが、4 A～4 B期になるとメソポタミア系土器は89～99%を占めるようになる。

前1千年紀

湾奥部には、ギリシア時代に先行する、前1千年紀のメソポタミア系土器が存在する。バハレーン砦のIV期(IV a～e期)に相当する時代であり、519地区では、「ディルムン王ウペリの宮殿」(Bibby 1969: 378)と呼ばれる大規模な建築複合、陶棺墓、壺・鉢棺墓、「蛇の生贋」などが発見された(Højlund and Andersen 1997)。ウペリはアッティアのサルゴン王(在位:前721～705年)に朝貢したディルムン王で、メソポタミア史料にディルムンの国名が現れる最後の例とされる。

ファイラカ島では、F 6丘で大型の釣鐘形土器を遺体上に伏せた埋葬が知られる。この土器は南メソポタミアに類似があり、前7世紀末、あるいは6～5世紀のものとされ

る。同島の南西にある小遺丘テル・ハズネー(Tel Khazneh)では神殿址が発見され(Calvet et Pic 1986)、供物と思われる各種土偶が280体余り出土した。この時代、オマーン半島では、土器を含むメソポタミア系遺物の出土は知られていない。

バハレーン砦の「宮殿」では、上下2つの床面(IV b、d期)が認められた。「蛇の生贋」は上床の時期のもので、建物の床面に小さな竪穴を掘り、トグロを巻いた蛇の遺体を収めた浅鉢を埋納したものである。陶棺墓は「風呂桶形」の陶棺を用いた成人埋葬、壺・鉢棺墓は、大型の壺または鉢を利用した小児埋葬で、IV e期に属している。従来、バハレーン島では、死者は集落外の共同墓地(古墳群)に葬られるのが常であった。IV e期の埋葬はあらゆる意味でメソポタミアの習慣に酷似するので、発掘者はメソポタミアからの移住者のものと指摘している。

IV期の土器インダストリーもメソポタミアのものに酷似する。基本的な器種は各種の鉢、壺、甕であり、鉢の中には釉を施したものもある(図10)。こうした容器は「蛇の生贋」や小児埋葬にも用いられている。またIV e期の陶棺は、一端が直線的な楕円形という特徴的な平面形をなしている。これらの土器は相当の時間幅を示しており、IV期は新アッティア/新バビロニア時代(IV a～b期)、アケメネス朝時代(IV c～e期)に相当する。

おわりに

アラビア湾岸で出土するメソポタミア系土器を通観すると、紀元前におけるほとんどの時代のものが揃っているように見える。しかし詳しく見るならば、抜け落ちた時代もあり、また地理的な分布圏も時代ごとに異なっていることに気づく。表面的な見方をすれば、これが「周辺」における「中心」のプレゼンスということになるが、それだけでは本特集の目的に添うものとはならないだろう。

湾岸におけるウバイド式土器は、しばしば来訪するメソポタミア人が、自己の使用に供するものとして携えてきたものであろう。この場合、湾岸自身にとっての土器はほとんど意味をなさない。湾岸のウバイド系文化は、メソポタミア人が湾岸で活動した証拠以上の何物でもない。

ジェムデッド・ナスル式土器はメソポタミア製品であるが、オマーン半島のハフィート文化は、イラン的要素(精製の彩文土器)ももっている。南メソポタミア、湾岸(特にオマーン半島)、ケルマーン(特にテペ・ヤヒヤIV c層)は、ジェムデッド・ナスル式土器によって結ばれており、メソポタミアに必要物資を供給するための原エラムの物流ネットワークに、湾岸地域も組み込まれたという理解が成り立つ。

オマーン半島では土器文化が着実に根付いた。ウンム・ア

ン・ナール文化では砂質土器（ブライミー式）の製作が始まり、イラン製の精製土器は専ら副葬品として使用されるようになる。ウンム・アン・ナール島で出土するメソポタミア製土器の多くが、物資の貯蔵・輸送のための容器で、それが集落でも墓でも相当数出土することは、ウンム・アン・ナール文明（マガン国）においては、対メソポタミア交易活動が活発で、メソポタミア製品が珍重されていたことを示している。この場合は、「中心」が「周辺」に力を及ぼしたのではなく、湾岸に力のある都市文明が興ったと理解すべきである。

バールバール文化は当初から自前の土器（赤色バールバール式土器）をもっていた。バハレーン砦のI～II期とファイラカ島の1～2期でわずかに見られるメソポタミア系土器は、わずかであるがゆえに、メソポタミア製品と考えてよいだろう。その後、バハレーン砦では相当長いヒアタスがあるが、ファイラカでは都市が存続する。そしてファイラカの3A期ではメソポタミア系土器が激増し、以後、土器全体の過半数ないし大半を占めることとなる。

この現象は確かに土器インダストリーのメソポタミア化を示す。ファイラカの3A期には、①メソポタミア製土器の大規模な搬入が始まったか、②メソポタミア人陶工が渡来して土器作りを開始した、そしてファイラカの土器文化の伝統は衰退に向かうのである。もし①であれば、ファイラカの人々がそれを必要とするようになったか、それを必要とする人が住み着いたかである。また②であれば、本来メソポタミアの都市に居住する陶工集団が、相当の理由により、当地に移住したことになる。そのような場合、例えばウルク期のように、精力的に拡張あるいは植民政策を実施した時代の話であれば、メソポタミアが隣接地を併合して、行政官をはじめとする都市社会のスタッフを本土から派遣したと解釈することも可能である。しかしバビロンの権威が地に落ちた時代のことであるから、クローフォードが述べるように、「海國王朝」によるメソポタミア最南部とファイラカ島の支配、ウルのディルムン商人のファイラカへの移住の方が可能性は高い。この場合は、メソポタミア南部における政治的・経済的・社会的不安定化が、ファイラカにおける土器インダストリーのメソポタミア化という形で表れたことになる。

バハレーンとファイラカの「カッシート時代」とされる土器インダストリーは、メソポタミア化の進行と定着という傾向を示す。しかし、ほぼ純粹のメソポタミア系の土器インダストリーである場合（バハレーン砦の519地区、ファイラカのF6丘）と、バールバール式の伝統がまだ相当残る場合（ファイラカF3丘）は、たとえば新しい住民と在来の住民のように、区別する必要があるかもしれない。

バハレーン砦IV期の「宮殿」はウペリのものであろう。つ

まりアッシリア帝国が友好的と認める外国の一つである、ディルムン国家がここに存在したのであり、「後期ディルムン時代」は非常に適切な名称ということになる。ところがその土器インダストリーは、メソポタミアのものにほぼ等しい。ディルムンは朝貢しているのだから、アッシリアに対して、友好的かつへり下る立場にあるとはいえ、メソポタミアの政治的支配下にある訳でも、メソポタミアを支配下においている訳でもない。ここから、土器インダストリーの類似は生活様式の類似を意味するが、そこから政治的支配関係までも読み取ってはならないという教訓が得られる。

このように、専ら出土土器の分析のみでメソポタミアとの関係を探ると、メソポタミアの湾岸支配が、いつの時期にはどこまで、どの程度及んだかというような、誤った議論に陥る危険性がある。実際には土器以外のさまざまな遺物が出土し、メソポタミア以外の遠隔地産物資も多く含まれる。またメソポタミア側では、湾岸に関する史料が、多くの時代に存在する。それらの内容を加味しても、湾岸が域外に「中心」をもつ何物かの「周辺」であった時期というものは認められないが、メソポタミア文明の親しい隣人として、それと交渉関係にあった時期が幾度かあったことは確かである。また湾岸はイラン高原やインド亜大陸、アラビア半島内陸部の隣人でもあったが、それらとの関係も、「中心と周辺」の関係とは異なるものであった。

参考文献

- 池ノ上 宏 1987 『アラビアの真珠採り』 イケテック。
 後藤 健 1983 「アラビア半島の新石器文化—二・三の問題—」『古代オリエント博物館紀要』第5巻 175～200頁。
 後藤 健 1997 「アラビア湾岸における古代文明の成立」『東京国立博物館紀要』第32号 11～144頁。
 後藤 健 1999 「古代文明と環境—イラン高原・アラビア湾岸における非農耕文明—」石・樺山・安田・義江編『環境と歴史』27～50頁 新世社。
 Boucharlat, R. et al. 1991 Note on an Ubaid-Pottery Site in the Emirate of Umm al-Qaiwain. *Arabian Archaeology and Epigraphy* 2 (2) : 65-71.
 Calvet, Y. and M. Pic 1986 Un nouveau bâtiment de l'âge du bronze sur le tell F6. In Calvet and Salles 1986, 13-87.
 Calvet, Y. and J.-F. Salles (eds.) 1986 *Failaka : Fouilles francaises 1984-1985*. Travaux de la maison de l'orient 12. Lyon, Maison de l'Orient.
 Cleuziou, S. 1989 Excavations at Hili 8 : a Preliminary Report on the 4th to 7th Campaigns. *Archaeology of the United Arab Emirates* 5 : 61-87.
 Costa, P.M. and M. Tosi (eds.) 1989 *Oman Studies : Papers on the Archaeology and History of Oman*. Rome, Istituto italiano per il medio ed estremo oriente.
 Crawford, H. 1996 Dilmun, Victim of World Economic Recession. *Proceedings of the Seminar for Arabian Studies* 26 : 13-22.

- de Cardi, B. (ed.) 1978. *Qatar Archaeological Report : Excavations 1973*. Oxford, Oxford University Press for the Qatar National Museum.
- During-Caspers, E. 1977 New Archaeological Evidence for Maritime Trade in the Persian Gulf during the Late Protoliterate Period. *East and West* 21 : 21-55.
- Frifelt, K. 1971 Jamdat Nasr Finds in the Oman. *Kuml* 1970 : 355 -383.
- Frifelt, K. 1989 ^cUbaid in the Gulf Area. In Henrickson and Thuesen 1989, 404-415.
- Frifelt, K. 1990 A Third Millennium Kiln from the Oman Peninsula. *Arabian Archaeology and Epigraphy* 1 : 4-15.
- Frifelt, K. 1991 *The Island of Umm an-Nar 1 : The Third Millennium Graves*. Jutland Archaeological Society Publications 26 (1), Højbjerg, Jysk Archaeologisk Selskab.
- Frifelt, K. 1995 *The Island of Umm an-Nar 2 : The Third Millennium Settlement*. Jutland Archaeological Society Publications 26 (2), Højbjerg, Jysk Archaeologisk Selskab.
- Glassner, J.-J. 1989 Mesopotamian Textual Evidence on Magan/Makan in the Late 3rd Millennium B.C. In P.Costa and M.Tosi (eds.) : 181-191.
- Haerinck, E. 1991 Heading for the Straits of Hormuz : an ^cUbaid site in the Emirate of Ajman (U.A.E.) *Arabian Archaeology and Epigraphy* 2 (2) : 84-90.
- Henrickson, E. F. and I. Thuesen eds. 1989 *Upon this Foundation : The ^cUbaid Reconsidered*. CNI Publications 10. Copenhagen, Museum Tusculenm Press.
- Højlund, F. 1986 *Danish Archaeological Investigations on Failaka, Kuhait. Failaka/Dilmun the Second Millennium Settlements Vol. 2 : The Bronze Age Pottery*. Jutland Archaeological Society Publications 17 (2). Højbjerg/Kuwait, Jutlend Archaeological Society/Kuwait National Museum.
- Højlund, F. and H. H. Andersen 1994 *Qala'at al-Bahrain Vol. 1 : The Northern City Wall and the Islamic Fortress*. Jutland Archaeological Society Publications 30 (1). Aarhus, Jutland Archaeological Society.
- Højlund, F. and H. H. Andersen 1997 *Qala'at al-Bahrain Vol. 2 : The Central Monumental Buildings*. Jutland Archaeological Society Publications 30 (2). Aarhus, Jutland Archaeological Society.
- Inizan, M.-L. 1980. Premiers resultants des fouilles préhistoriques de la région de Khor. In Tixier 1980, 51-97.
- Kapel, H. 1965 Stone Age Discoveries in Qatar. *Kuml* 1964 : 112-155.
- Kapel, H. 1967 *Atlas of the Stone-Age Cultures of Qatar : Report of the Danish Archaeological Expedition to the Arabian Gulf I*. Jutland Archaeological Society Publications 6. Aarhus, Aarhus University Press.
- Lamberg-Karlovsky, C.C. and M. Tosi 1973 Shahr-i Sokhta and Tepe Yahya : Tracks on the Earliest History of the Iranian Plateau. *East and West* 23 : 21-58.
- Masry, A.H. 1974 *Prehistory in North Eastern Arabia : The Problem of Interregional Interaction*. Miami, Field Research Projects.
- Mortensen, P. 1971 On the Date of the Temple at Barbar in Bahrain. *Kuml* 1970 : 385-398.
- Oates, J. 1976 Prehistory in Northeastern Arabia. *Antiquity* 50 : 20-31.
- Oates, J. 1978 ^cUbaid Mesopotamia and its Relations to Gulf Countries. In de Cardi 1978, 39-52.
- Oates, J. et al. 1977 Seafaring merchants of Ur ? *Antiquity* 51 : 221 -234.
- Piesinger, C. 1983 *Legacy of Dilmun*. Unpublished dissertation, Univ. of Wisconsin.
- Tixier, J. (ed.) 1980 *Mission archéologique française à Qatar 1976 -1977, 1977-1978 (T.I)*. Paris, CNRS, Recherches anthropologiques au Proche et Moyen Orient.
- Uerpmann, M. and H.-P. Uerpmann 1996 Ubaid Pottery in the Eastern Gulf : New Evidence from Umm al-Qaiwain (U.A.E.). *Arabian Archaeology and Epigraphy* 7 (2) : 125-139.
- Vita-Finzi, C. 1978 Environmental History. In de Cardi 1978, 80-106.

後藤 健
東京国立博物館
Takeshi GOTOH
Tokyo National Museum